

商品形態の歴史的規定性について

—物神性論の解明—

福田 泰 雄

はじめに

マルクスは、いわゆる物神性論において、商品の呪物性とその秘密、特に秘密の解明を通して、それまでの価値実体論、価値形態論においては前提とされてきた商品形態そのものを歴史的視点からとらえ返し、第一章商品論を締め括る。学説史的にも、物神性論は、ブルジョア的生産様式が永遠の自然的形態であるとの認識の上に立つスミス、リカード古典派経済学の没歴史的・商品・価値論の限界を打ち破るきわめて重要な意義を持つ。しかし、そもそも商品の呪物性とは何か。それはいかなる理由によって必然化するのか。

物神性論に関する従来の研究について言えば、資本論の平板な言い換えや単なる語句の詮索の域を越えて中心論点への肉迫を試みた数少ない論者として廣松渉氏、武田信照氏がおられるが、しかしそのいずれにおいても看過しえない難点を持つ。廣松氏は、商品の価値属性は、人々の思念の産物、幻想であり、「物象化的錯視」⁽¹⁾、「物象化的仮現」⁽²⁾にすぎないとの立場から、商品の呪物性とは「商品それ自身が『価値』という対象性をそなえている」⁽³⁾かのごとき性格であるとされる。これに対し、武田氏は、「商品

の呪物性とは、商品が一商品としてではなく一物として、価値という属性をあたかも他の物理的・化学的屬性と同じように生まれながらにしてもつかのごとき性質である⁽⁴⁾」と反論されたが、この争点に関しては武田氏が正しい。しかし、商品の呪物的性格は、商品がそこにおいて現実化される交換の場において現れるものであり、その交換において商品は価値物として一定の量的比率の下で価値関係を取り結ぶ。それゆえ、商品の呪物性は、単に価値に関わるばかりか価値量、価値関係にもかかわるものとして把握されなければならない。また、呪物性の秘密については、武田氏は、抽象的人間労働＝超歴史的範疇の立場⁽⁵⁾から秘密の解明を試みられる。しかし、私的諸労働は、抽象的人間労働の形態をとることによって社会的労働となり、社会的関係に入るのであるから、抽象的人間労働が仮に超歴史的に成立するものであれば、私的生産者は、とりわけて労働生産物を商品として交換する必要はなくなる。とすれば、商品交換に伴って生ずる呪物性の存立余地もなくなる。特殊歴史的範疇としての抽象的人間労働が呪物性発生不可欠のモメントをなす。

それゆえ、本稿においては、まず商品の呪物性とは何かをその全体像において明らかにし、その上で次に、特殊歴史的な抽象的人間労働を軸概念として呪物性発生メカニズム・必然性、すなわち、呪物性の秘密を明らかにする。そのことによって商品形態の特殊歴史性が確定し、あわせて方法論として史的唯物論を背後に持つマルクス価値論の古典派価値論に対する優位性が明らかとなる。

(1) 廣松渉『資本論の哲学』現代評論社、1974年、p. 205.

(2) 同書、p. 258.

(3) 同書、p. 200.

(4) 武田信照「商品の呪物性」(愛知大学法経学会)『法経論集』84号、1977年7月、p. 44.

(5) 同, pp. 45-6 参照.

第一節 商品の呪物性

本節では、商品の呪物的性格とは何かを明確化する。それは、次節以降で呪物性の秘密を解明するための前提である。謎的性格の正確な理解なくして秘密の解明はその対象目標を失う。実際、物神性論をめぐる議論の混乱化の第一の原因はこの呪物性把握の不明快さに存する。

呪物性は、それが商品である限り等価形態に立つ商品にも相対的価値形態に立つ商品にも付着する。ただし、等価形態にある商品に付着する呪物性は相対的価値形態にある商品に付着するそれがより明確化したものすぎない。「呪物性は等価形態においては相対的価値形態におけるよりもいっそう顕著に現れてくる」(*Das Kapital*, Erste Auflage, Hamburg, 1867 [以下 KI, 1 Auf. と略], S. 774)。それゆえ、相対的価値形態に立つ商品に付着する呪物性は商品一般に付着する呪物性といえる。マルクスは、その商品一般に付着する呪物性を物神性節の冒頭パラグラフにおいてきわめて象徴的な形で次のように述べる。「机が商品として現れるやいなや、それは一つの感覚的であると同時に超感覚的であるものになってしまう。机は、自分の足で床の上に立っているだけではなく、他のすべての商品に対して頭で立っており、そしてその木頭からは、……奇怪な妄想を繰り広げる」(*Das Kapital*, *Marx-Engels Werke*, Bd. 23, Dietz Verlag, Berlin, 1962 [以下 KI 1 と略], S. 85)。しかし、引用文中の「超感覚的」とは商品のいかなる性質を言うのか、また商品の呪物性を表現するものと思われる「机は自分の足で……」以下の文章は具体的にいかなる事態を指すのか。

商品相互の交換関係は、「諸物の社会的諸関係」(ibid, S. 87)をなし、商品はそうした社会的諸関係をとり結ぶ「社会的な物」(ibid., S. 86)として感覚的かつ超感覚的な物となる。商品は、有用な物、使用価値として

は物理的に把握可能などという意味で感覚的なものであり、また他の商品と交換可能な社会的な物として物理的には把握不可能な超感覚的な物なのである。商品がこのように互いに交換される社会的なものであることは日々確認される事実であり、そのことは妄想でも幻想でもない。

だが、商品交換の繰り返し、そうした「日常生活の習慣」(*Zur Kritik der Politischen Ökonomie* [以下 Kritik と略], 1859, MEW., Bd. 13, S. 22) の下で、労働生産物はいつも商品形態をとると観念され、労働生産物と商品とが直接的に同一視されれば、商品の交換関係は労働生産物の自然的属性に基づくものと見えてくる。本来、物が視神経に与える光の印象は、光を媒介とする自然対象と目との、つまり物と物との「物理的な関係」(KI, S. 86) であるのに対し、商品相互の物的交換諸関係は、後述するように、労働の社会的関係の反映であって「労働生産物の物理的な性質やそこから生ずる物的な関係とは絶対になんの関係もない」(ibid.)。しかし、商品世界では、労働生産物は「自らの生命」(ibid.) を持ちそれ自身独立的に相互に交換関係を取り結ぶと映る。それゆえ、商品交換、商品の社会性は、労働生産物の物理的性格とは無関係な「超感覚的」なものであるのだが、商品世界の人々にはむしろ感覚的なものと把握される。つまり、諸物の社会的関係が「労働生産物の本性」(ibid., S. 89) から生ずるかにみえる事態は、本来は「奇怪な妄想」にすぎないのであるが、現象の世界では、何ら奇怪ではなくごく自然のことと把握される。商品の呪物性とは、こうした労働生産物が「それ自身の生命を与えられてそれら自身の間でも人間とのあいだでも関係を結ぶ独立した姿に見える」(ibid., S. 86) 事態である。先の引用文にもどっていえば、マルクスは、商品机が他の商品と諸物相互の社会的関係を取り結ぶ事実を「机は……他のすべての商品に対して頭で立つ」といい、そしてその社会的関係に付随する呪物的性格、すなわち、机と他の諸物との関係が机の自然的属性から生ずるかに見える事

態を指して「木頭からは……奇怪な妄想を繰り広げる」と洒落た言い方をしたのである。⁽¹⁾

以上、われわれは、商品交換を諸物の社会的諸関係として、日常あるがままの姿でとらえた上で、そこにおいて商品に付着する呪物性の内容を示したが、商品の交換関係とは、ヨリ分析的に表現すれば、商品と商品との価値関係、等価の関係である。商品は交換において、互いに同等な価値物として、しかも一定の量的規定（価値量）の下で、相互に価値関係に入る。従って、商品交換を諸物の社会的諸関係からさらに掘り下げて価値関係として把握すれば、商品の呪物性もそれに対応してヨリ分析的な表現、規定を受けとる。すなわち、諸物の社会的諸関係が諸物の自然的、物理的属性から生じると映ずれば、同時に、価値、価値量が諸物の物理的属性をなし、価値関係がその物理的属性から生ずると映ずること不可避である。

第一に、商品の社会的関係の基礎をなす商品の共通な価値性格は諸物の自然的属性と現れる。「交換価値は、使用価値に属する一つの規定として現れる」(Kritik, S. 22)。次の引用文は、この事態を否定するかに見える。「この呪物性は等価形態においては相対的価値形態におけるよりもいっそう顕著に現れてくる。一商品の相対的価値形態は媒介されている。……このことのうちには、同時に、価値存在はその物自体には無縁な関係であり、従ってまた、他のある物に対するその物の価値関係は、ただ、その背後に隠されている一つの社会的な関係の現象形態でしかありえない、ということがある。等価形態の場合は逆である。……等価形態がこの関係の外でも天然に商品Bに具わっているように見える」(KI, 1 Auf. S. 774-5)。だが、当引用文は、価値性格が物の属性と見える商品の呪物性の存在を否定するものではない。相対的価値形態についての叙述はあくまで等価形態の場合と比較しての話である。比較は同質性を前提としてのみ可能となる。相違は、呪物性の程度問題、背後の労働の社会的関係の痕跡の喪失度合で

ある。相対的価値形態においても、つまり商品一般においても、その「価値存在」はやはり物の自然的属性と映ることに変わりはないのである。

商品世界の日常意識から脱しきれない一部の経済学者は、商品に代ってこの呪物性の内容を端的に表明する。かの S. ベイリーは言う。「価値は物の属性であり、富は人間の属性である。価値は、この意味では、必然的に交換を含んではいるが、富はそうではない⁽²⁾。「富は人間の属性であり、価値は商品の属性である。人間や社会は富んでいる。真珠やダイヤモンドには価値がある。……真珠やダイヤモンドには、真珠やダイヤモンドとしての価値がある⁽³⁾」。ベイリーは、価値とは内在的なものを指すのではなく二商品の関係を指すにすぎないと理解し、価値の背後に労働の問題が存在することを否定したのであるが、それがために、ベイリーは、投下労働価値説を説くリカードに対し価値は商品に内[・]在[・]的[・]な[・]も[・]の[・]で[・]は[・]な[・]い[・]と[・]繰[・]り[・]返[・]し[・]反[・]駁[・]を加えておきながら、結局は、呪物崇拜者の立場からではあるが、価値は物の属性であるとしてみずからも価値を内[・]在[・]的[・]な[・]も[・]の[・]と主張する羽目に陥る。そうした自己矛盾はともかくとしても「呪物性の使徒」ベイリーは、「労働の社会的な性格が物の『属性』として……『表され』、また、社会的な関係が物……の間の関係として現象する……この外[・]観[・]を、ある現実的なものと解し、そして実際に、物の交換価値は、物としてのその属性によって規定され、一般にその物の自然的属性であると信じているのである」(Theorien über den Mehrwert [以下、Mehrwert と略], Marx-Engels Werke, Bd. 26, Dritter Teil, S. 127)。

第二に、商品世界にあっては、価値量、具体的には、一定比率での交換は、あたかも物の属性、物の本性から生ずると映ずる。「この割合がある程度の慣習的固定性をもつまでに成熟してくれば、それは労働生産物の本性から生ずるかのように見える。例えば、1 トンの鉄と 2 オンスの金とが等価であることは、1 ポンドの金と 1 ポンドの鉄とがそれらの物理的屬性

や化学的屬性の相違にもかかわらず同じ重さであるのと同じことのように見える」(KI, S. 89). ある商品の価値量, つまりその商品と他の商品との交換割合は, 労働の社会的配分の反映でしかないのであるが, 背後の労働配分の痕跡は消失し, 価値量・交換比率のみが現象の世界に残り, 従って価値量・交換比率は物の重さや, 光沢と同様に物の自然的屬性に由来すると見える。

それゆえ, 第三に, 諸物の社会的関係そのもの, すなわち価値関係は, 諸物の自然的屬性から生ずると見える。「商品形態……が現れるところの諸労働生産物の価値関係は, 労働生産物の物理的な性質……から生ずる物理的な関係」(ibid., S. 86) と見える。価値関係の具体的かつ完成された形態は諸商品と一般的等価物金との等値関係, すなわち, 諸商品の価格形態であるが, 諸商品はその価格形態を物理的に生まれながらにして持っているかのように見えるのである。次の一文は, 価値関係に付着する呪物性⁽⁴⁾の存在を否定するかに見えるがそうではない。「商品では, この神秘化はまだきわめて単純である。交換価値としての諸商品の関係は, むしろ人々の彼らの相互の生産的活動にたいする関係であるという考えが, 多かれ少なかれ, すべての人の頭にある。もっと高度の生産諸関係では, 単純性というこの外観は消えうせてしまう」(Kritik, S. 22). (交換) 価値の関係は, 労働の社会的関連の反映であるという考えが, 多少とも人々の頭にあるという一文は, 商品の神秘化がもっと高度の生産諸関係における貨幣, 資本の神秘化と比べて「単純」であることを説明してのものであり, 右引用文を全体として見れば, その一文が商品の神秘化・呪物性を否定するものではないことは明らかである。単純ではあれ, 商品も神秘化を伴い, その世界においては価値関係は, その背後の労働の相互的関連と切り離されて, 物の自立化した関係と見えるのである。尚, 先に, 商品の価値対象性, 価値量が商品の物としての物理的屬性と見えることを述べたが, そうした神秘

化は、実は価値関係が生産物の物理的關係と把握されることから不可避的に生ずる事柄であったのである。

商品は、他の商品所持者にとって有用であり、かつまた他商品と質的同一性、共通の価値性格を有するものとして互いに交換される。交換は、商品相互の社会的關係であり、商品を社会的なものとする。これらのことは、商品交換部面における事実であり、⁽⁵⁾ 仮託でも仮現でもない。その事実に見物性は無い。しかし、商品形態、商品交換が日常生活の習慣によって自明のことあたりまえのことと把握されるに伴い、商品の交換、社会的關係は、諸物の自立的關係として、従って労働の社会的關係の特殊歴史的な表現形態としてではなく、物の自然的屬性から生ずる永久不変の關係として映じるに至る。それゆえ、価値、価値量は、物にそなわる物理的屬性として、価値關係はそうした物の物理的性格から生ずる超歴史的な關係として見えてくる。ここに商品の呪物的性格がある。労働生産物は生まれながらにして交換されるもの、歴史貫通的に交換可能性の形態・価格形態を持つものとして現れるのである。

- (1) 呪物性の理解においては、宮沢俊郎「商品の呪物的性格とその秘密」(種瀬茂編著『資本論の研究』青木書店、1986年、所収)に負うところが多い。
- (2) S. Bailey, *Observations on Certain Verbal Disputes, Particularly Relating to Value, and to Demand and Supply*, London, 1821, p. 16.
- (3) S. Bailey, *A Critical Dissertation on The Nature, Measure and Causes of Value*, London, 1825, p. 165. 鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判』日本評論社『世界古典文庫』版、1947年、p. 151.
- (4) マルクスは、「金銀は、地の底から出てきたままで、同時にいっさいの人間労働の直接的化身である。ここに貨幣の魔術がある」(KI, S. 107)と貨幣の呪物性を指摘するが、金銀が超歴史的にその自然的屬性において貨幣であると見える呪物性は、商品が生まれながらにして価格を持つかに見える呪物性と表裏一体の關係にある。
- (5) ルカーチは、商品の呪物性を次のように把握する。「商品構造の本質は、

人間と人間との関わりあい、関係が物象性という性格をもち、こうしてまた『幻影的な対象性』をもつようになり、そしてこの対象性が、その厳密な、見かけ上は完結した、合理的な独自の法則のなかに、みずからの根源的な本質である人間関係のすべての痕跡を蔽い隠している、ということにある」(G. Lukács, *Geschichte und Klassenbewußtsein*, 1923, Werke, Bd. 2, Frühschriften. II, S. 257. 城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社, 1975年, p. 162). 対象性が人間関係の痕跡を蔽い隠すことから「幻影的な」性格が生じるという指摘は正しいが、ここには、物象性＝対象性と物神性との区別と関連把握において曖昧さがある。実際、ルカーチは「対象性形態としての商品の物神的性格」(ibid., S. 258. 訳 p. 162)と述べ、対象性形態と呪物性を同一視するのである。対象性形態と呪物性が全く同一の事柄であるとすれば、幻影、倒錯の世界に属する呪物性と同様、対象性形態、具体的に言えば、価値、価値量、価値関係も幻影、倒錯の産物とならざるをえない。コルシュの呪物性把握がその適例である。「この社会関係の一形態が、ブルジョワ意識から見ると……倒錯的・物神崇拜的に商品の外見上の価値関係となって見える」(K. Korsch, *Hundert Jahre Marx. Eine geschichtliche und kritische Darstellung seines Werks*. 野村修訳『マルクス』未来社, 1967年, p. 156). このコルシュの主張をそのまま受け継ぐのが広松渉氏である。「価値実体、価値量、価値形態なるものは……錯視」(前掲『資本論の哲学』p. 258)、「物象化的仮現」(同)である。コルシュ、広松氏にあっては商品の呪物性は、商品の価値性格そのものであり、翻って商品の価値性格は、幻想物、錯視と規定される。両氏の主張が、呪物性、商品の価値規定把握における誤解に基づくことは本文からすでに明らかだろう。

第二節 商品生産労働の矛盾的性格

それでは、商品の呪物性は一体どこから生じるのか。結論を先取りして言えば、「商品世界の呪物的性格は……商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずる」(KI, S. 87)。しかし、商品を生産する私的諸労働の「特有な社会的性格」とは何か。さらに一步遡って、そもそもその「特有

な社会的性格」に比較されるところの、あるいは、その特有性を規定する際の基準となるところの労働の歴史貫通的一般的な社会的性格とは何か、そして、商品生産社会において、私的諸労働は何故に「一般的な」ではなく「特有な」社会的性格を取らざるをえないのか。それは、商品を生産する私的諸労働の矛盾的性格に起因する。それゆえ、本節では、呪物性の発生メカニズムを解明すべく、そのための前提として非商品生産様式の下での労働の社会的性格との対比において商品生産様式の下での私的諸労働の特質・矛盾的性格を明らかにする。

マルクスは、非商品経済としてロビンソンの孤立人、封建的農奴制、農民家族の家長制、自由連合社会の四例をあげ、それぞれにおいて商品生産労働と区別される労働の性格を剔抉するが、非商品生産社会における労働は、その具体的現物形態が直接に社会的性格を有するという点で共通性を持つ。しかし、労働の現物形態が直接的に社会的形態をなすとはどういうことか。労働が社会的労働としていかなる生産様式下にあろうと必ず満たさなければならない一般的な条件が存在する。非商品生産社会においては、その条件は労働の現物形態においてそのまま直接に満たされる。それゆえ、ここでは労働はその現物形態のまま直接に社会性を有するのである。その条件とは何か、その条件が直接的に満たされるとはどういうことか、先の四タイプの生産様式に即して見ておこう。

労働が社会的であるための一般的な条件とは、価値の諸規定の根底にある「内容」に他ならない。第一は、共通の価値性格の根底にあるもの、すなわち、種々の労働はその生産活動形態の相違にもかかわらず同等の人間労働——人間の脳や、神経、筋肉、感覚器官等の支出——だということ、第二は、価値量規定の根底にあるもの、すなわち、支出された労働量のその継続時間による尺度、第三は、価値関係、価値形態の規定の根底にあるもの、すなわち、労働の社会的関連、社会的性格である。第一、第二の条

件は、第三の条件成立の前提となる。これら歴史貫通的「価値の諸規定の内容」(ibid., S. 85) は、非商品生産社会においては「労働の現物形態」(ibid., S. 91) によって直接満たされる。第一例は、ロビンソンの孤立人である。

島上のロビンソンも種々の自己の要求を満足させるべく「いろいろな種類の有用労働」(ibid.) を行わなければならない。その場合、第一に、労働はそれぞれ種類が異なるとはいえ、それらが皆同じロビンソンの諸活動形態でしかなく、従ってすべて同等の人間労働であることは、ロビンソンにとって明瞭である。「彼の生産的諸機能はいろいろに違ってはいるが、彼は、それらの諸機能が同じロビンソンのいろいろな活動形態でしかなく、従って人間労働のいろいろな仕方ではないということを知っている」(ibid.)。ここでは、種々の労働はその諸具体的形態のままで人間労働としての同等性 (Gleichheit) を初めから有しているのである。第二に、ロビンソンの労働にあっては、労働の支出は直接的にその具体的有用労働の継続時間によって尺度される。なぜなら、個々の労働は最初から総労働の諸環をなすものとして支出されるからである。「彼の財産目録のうちには……いろいろな生産物の一定量が彼に平均的に費やさせる労働時間の一覧表が含まれる」(ibid.) が、それをもとに「彼は自分の時間を精確に自分のいろいろな機能のあいだに配分する」(ibid.)、つまり総労働の各部面への社会的配分はあらかじめ決められたうえでなされる。それゆえ、個々の具体的労働の支出は最初から社会的に必要な割合をなす。だからこそ、労働の支出は、直接その支出時間によって尺度されるのである。それゆえ、第三に、総労働に対する個々の労働の関連、労働相互の社会的関連もここでは労働の具体的特殊形態を直接媒介として実現される。

要するに、ロビンソンにあっては、彼がいっさいの労働を行うという特殊事情に、個々の労働はその「現物形態 Die Naturalform der Arbeit」

(ibid.) のままで、人間労働としての同等性を有し、その支出量はあらかじめ社会的妥当性を持ち、かくして総労働の有機的諸環を形成する。各種の労働はその現物形態のままで社会的なものとして「価値の諸規定の内容」を実現するのである。

ロビンソンの労働についてのべたことは、中世の封建的農奴制下の労働についてもあてはまる。ここでは、ロビンソンの「独立した男」(ibid.) に代って「農奴と領主、臣下と君主、俗人と聖職者」(ibid.) という「人的従属関係」(ibid.) が社会の基礎をなす。だが、この「人的従属関係」が労働の社会性の直接的実現を保証する。例えば、農奴が提供する夫役、貢納について見れば、農奴は、第一に、その夫役、貢納のための労働が自己のものであることを知っている。しかも、第二に、それが自己の何時間分の労働であるかを知っている。農奴は、夫役が「自分自身の労働力の一定量だということを知っている」(ibid.)。ここでも労働の支出は、具体的労働の継続時間によって尺度される。労働は、あらかじめ社会的配分が決められたうで支出されるからである。つまり、第三に、農奴は、自己の労働と総労働との関連を把握しており、従って農奴は労働を直接媒介として社会的関連をとり結ぶ。「労働や生産物は夫役や貢納として社会的機構のなかには行って行く」(ibid.)。それゆえ、「労働も生産物も、それらの現実性とは違った幻想的な姿をとる必要はない」(ibid.)。人格的支配隷属関係の下で、労働はその「現実性」(ibid.)、具体性そのまま社会性を有し、「価値の諸規定の内容」を実現するのである。

さらに、農民家族の家父長制下の労働においては、直接的支配隷属関係に代って「個人的人間の未成熟」(ibid., S. 93) による種族的依存関係が「直接に社会化された労働」(ibid., S. 92) を実現する。ここでは、農耕、牧畜等の労働は家族労働の一器官としてのみ存在する。「個人的労働力」(ibid.) は「はじめからただ家族の共同的労働の諸器官として作用する」

それゆえ、「いろいろな労働、農耕や牧畜や紡績や織布や裁縫などは、その現物形態のままで社会的な諸機能」(ibid.)を担い、「継続時間によって計られる個人的労働力の支出は……はじめから労働そのものの社会的規定として現われる」(ibid.)。要するに、個々の労働は、そのまま家族労働としての同等性 (Gleichheit) を持ち、従って労働支出の社会的尺度は、具体的労働の継続時間で直接なされ、最後に、その具体的労働を介して各人は家族員相互の社会的関係に入る。家族という枠内においてであれ、生産物や労働は、そのまま「社会的生産物」(Kritik, S. 20)、「社会的労働」(ibid.)をなし、労働はその現物形態において「内容」を実現するのである。

マルクスが指摘する第四例、「自由な人々の結合体」(KI, S. 92)においても基本的に变りはない。この場合には、生産の前提である共同体が構成員の労働を最初から共同体労働の一分肢とする。それゆえ、ここでは「個人的にではなく社会的に」(ibid.)、「ロビンソンの労働のすべての規定が再現する」(ibid.)。第一に、個々の労働はその現物形態のままで共同体労働としての同等性を有する。第二に、「労働時間の社会的に計画的な配分は、いろいろな欲望に対するいろいろな労働機能の正しい割合を規制する」(ibid., S. 93)が、こうした労働の社会的均衡配分が具体的労働を直接ベースとしてなされることはロビンソンの場合と同じである。それゆえ、第三に、生産者は、現物形態にある労働を直接介して社会的関係に入る。共同体労働は、初めから社会的労働としてその現物形態のまま「内容」を実現するのである。また、それだからこそ、生産において「人々が彼らの労働や労働生産物に対してもつ社会的関係は……生産においても分配においてもやはり透明で単純なのである」(ibid.)。

要するに、非商品生産社会においては、生産の背後にあって生産を規制する「種属関係」や「直接的支配隷属関係」や「共同体」の存在により、

「労働の現物形態が、そして商品生産の基礎の上でのように労働の一般性がではなくその特殊性が……労働の直接に社会的な形態」(ibid., S. 91)をなし、労働はその具体的現物形態のまま「内容」を実現する。まさに、「労働の一般性ではなくて特殊性が、社会的紐帯をなすのである」(Kritik, S. 21).

これに対し、商品生産様式下における個別労働は直接には私的形態にある。つまり、個々の部門での特殊、具体的労働は直接的には社会的形態にはない。商品生産社会では、労働を投下する際、家長や共同体に相当するような労働をあらかじめ各分野に計画的に配分する規制システムは存在しない。私的生産者は、自己の個人的判断に従って各自勝手に、何を、どれだけ生産するのか、つまり労働をどの分野にどれだけ投下するのかを決める。つまり、各生産者は、自己の労働が他の労働といかなる関係にあるのかをあらかじめ認識することは出来ない。それゆえ、生産者は労働の現物形態を通して直接社会的関係に入ることは出来ない。また、私的諸労働は、そのままでは何ら社会的に関係しないのであるから労働の現物形態は互いに同等の関係にもない。さらに、仮に各私的労働の支出をその継続時間によって尺度したところで、その尺度は社会的意義を有しない。その継続時間は、社会的総労働の有機的編成上の均衡条件を一般に満たさず、また表示するものでもなく、あくまで私的労働支出の量的表示にすぎないからである。このように、私的労働は、それ自体では労働の社会的性格を表現する「内容」の三要件をどれも満たさないのである。

しかし、以上述べたことは私的労働の基本性格とはいえその半面にすぎない。他面では「私的諸労働の複合体は社会的総労働をなす」(KI, S. 87)。私的諸労働は自然発生的社会的分業の一分枝をなし、諸私的労働の総体は、一つの社会的体系を形成する。その体系において、私的労働は他の私的諸労働を前提とし、またその前提となる。私的諸労働は「互いに独立に営ま

れながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に依存しあうのである」(ibid., S. 89). 私的諸労働は、一面では、私的に互いに独立して営まれるのであるが、同時に他面では、自然発生的社会的分業の諸環をなすものとして互いに社会的に依存しあう。

それゆえ、私的諸労働は、社会的分業の諸環としての社会的性格と自然発生的社会的分業の諸環としての私的性格との相矛盾する性格の統一をなす。従って、私的諸労働は、直接的には私的労働でありながら、同時に社会的労働としてその社会性を改めて実証しなければならない。すなわち、私的諸労働は、その私的性格故、その現物形態においては「内容」を実現しえないのであるが、しかし、同時にその社会的性格からすれば、「内容」の実現を必要とする。ここに私的諸労働のジレンマがある。ジレンマはいかにして解決されるのか。次にこのことをみよう。なぜなら、ジレンマ解決の過程がまさに商品呪物の生成過程をなすからである。

第三節 呪物性の秘密

前節で見たように、私的諸労働は、直接には、従ってその現物形態のままでは、社会的形態にはなく私的労働にすぎないが、しかし、自然発生的ではあれ社会的総労働の諸環をなすものとして、社会的性格を実証しなければならない。私的諸労働はいかにしてそのことを果すのか。本節では、私的諸労働がその社会性を実証する独特の様式、すなわち、「内容」を実現するための形態が、労働の抽象的、一般的形態であり、しかも私的生産者は、そうした労働の独特な社会性を労働生産物の価値対象性、価値量、価値関係として実現することを示す。すでに触れたように、こうした私的諸労働がその社会性を実証する独特な仕方、すなわち、「商品を生産する労働の特有な社会的性格」が商品に付着する呪物性の秘密、呪物性の根拠をなすのである。

再三指摘したように、私的諸労働は、直接には社会的形態にない。労働生産物の交換によって初めて社会的関係に入り社会的性格を実証する。「私的諸労働は、交換によって労働生産物がおかれ労働生産物を介して生産者たちがおかれるところの諸関係によって、はじめて実際に社会的総労働の諸環として実証される」(KI, S. 87)。生産の背後に共同体や家父長制が存在する場合には、労働は最初から社会的労働であるのだが、私的的商品生産労働は、人間労働としての社会的性格を物と物との交換関係を通して、物的関係を介在させることによって初めて実証する。社会的分業体系の諸環をなすものとして社会性を有しながら、直接的現物形態においては私的労働でしかないそうした私的諸労働の矛盾が、物的関係を媒介とするその社会性の実証を不可避とするのである。しかし、ヨリ詳しく見た場合、私的諸労働はその社会性をこの物的関係においてどのようにして実現しているのか。価値の諸規定の「内容」は、物的形態においていかに実現されているのか。

第一は、「内容」の最初の要件、人間労働としての同等性を私的諸労働はいかにして実現するのかである(物神性節第7, 第8パラグラフ)。私的労働とはいえ、社会的分業の諸環を担う以上、それは一定の有用労働として何らかの社会的欲望を満たさなければならない。私的諸労働は「一定の有用労働として一定の社会的欲望を満たさなければならない、そのようにして自分を総労働の諸環として、社会的分業の自然発生的体制の諸環として、実証しなければならない」(ibid.)。ところで、この個々の労働が他人にとっての有用労働をなすことそれ自体は、商品生産的労働に限らずいかなる生産様式の場合においても労働が社会的なものである限りあてはまる。ただ、非商品生産社会においては、生産物の交換を介することなく、個々の労働は最初からそのまま他の労働と同等と認められ、現物形態において他の生産者の欲望を満たすべく社会的認知を受けていた。ところが、分業

が自然発生的であり、従って労働が私的労働である場合、個々の労働は直接には他の労働と同等性を有さず、そのため一定の社会的欲望を満たしえない。私的諸労働は、人間労働としての同等性の形態を独自に獲得する必要がある。そのことによって、私的諸労働相互の交換が可能となり、その交換によって私的諸労働は一定の社会的欲望を満たすのである。「私的労働がそれら自身の生産者たちのさまざまな欲望を満足させるのは、ただ、特殊な有用な私的労働のそれぞれが別の種類の有用な私的労働のそれぞれと交換可能であり、したがってこれと同等と認められるかぎりでのことである」(ibid.)。それでは、私的諸労働はその「同等性」をいかにして実現するのか。私的具体的諸労働の抽象的人間労働への還元によってである。「互いにまったく違っている諸労働の同等性は、ただ、諸労働の現実の不等性の捨象にしかありえない。すなわち、諸労働が人間の労働力の支出、抽象的人間労働として持っている共通な性格への還元にはしかありえない」(ibid., S. 87-8)。私的諸労働は、抽象的人間労働への自己の労働の還元によって同質化され、交換関係・社会関係を実現するのである。

繰り返せば、私的諸労働の社会的形態、つまり、人間労働としての同等性の形態は、労働の抽象的、一般性の形態として実現されるのである。「諸私的労働の社会的な形態がなににあるのか……。諸私的労働の社会的な形態とは、同じ労働としてのそれらの相互の関係である。つまり、千差万別のいろいろな労働の同等性はただそれらの不等性の捨象においてのみ存在しうるのだから、それらの社会的な形態は、人間労働一般としての、人間労働力の支出としての、それらの相互の関係であって、このような人間労働力の支出は、すべての人間労働が、その内容やその作業様式がどうであろうとも、実際にそういうものなのである」(KI, Auf., S. 32)。労働の抽象的一般性の形態が私的諸労働を同等なものとし互いに社会的に結びつける。例えば、100ポンドの亜麻糸と100エレのリネルにはそれぞれ

紡績工と織布工の等しい労働時間が投下されているとしよう。この場合、共に私的労働である紡績労働と織布労働とは、両者の労働時間がそれぞれ具体性の捨象を通して同等な「一般的労働時間として……あらわされることによってだけ、一方の労働は他方のための労働となり、つまり彼らの労働が両者のための社会的定在となる」(Kritik, S. 20. 傍点引用者)。

畢竟するに、労働の抽象的一般性は、私的諸労働が、人間労働としての同等性を得て「社会的性格を受け取る場合の独特な形態……をなす」(ibid.)。価値の実体をなす抽象的人間労働の規定は「労働の社会的諸規定または社会的労働の諸規定であるが、社会的といっても一般に社会的だというのではなく、特殊なあり方での社会的である。それはある独特な種類の社会性である」(ibid., S. 19)。両引用文中の「独特な形態」、「独特な種類」とは、商品生産様式に固有なという意味で特殊歴史性を強調するものであることはいうまでもない。非商品生産社会では、紡績労働、織布労働等はその特殊性のままに「社会的労働」(ibid.)をなし「社会的紐帯」(ibid., S. 21)をなすが、商品生産様式においては、個々の労働が「社会的となるのは、それがその正反対の形態、抽象的一般性の形態をとることによってである」(ibid.)。労働の抽象的一般性の形態は、生産力の一定の歴史的発展段階としての商品生産様式に事態適合的なもの、そこにおいて「人間労働の同等性」を実証するものとして固有の機能を担うのである。

このように、私的諸労働は、労働の抽象的一般性の形態をとることによって初めて人間労働としての同等性を実証しうるのであるが、しかし、この私的諸労働の独特な社会的形態は、また、生産物の価値対象性として物的性格・物的形態において実現される。なぜなら、私的諸労働の抽象的人間労働への還元は、交換において生産物どうしが価値として関係することによって実現されるからである。「交換だけが、この上なく多様な労働生産物を同等の立場で相互に対面させることによって、こうした還元を行な

う」(KI, 仏語版, p. 29). 「異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置する」(KI, S. 88). それゆえ、労働の抽象的一般性は、「生産物交換で現れる諸形態」(ibid.), 諸物の価値対象性として現される。諸労働生産物の価値属性が、私的諸労働の社会的形態、人間労働一般の「客観的形態」(KI, 仏語版, S. 29) をなすのである。それゆえ、「私的生産者たちの頭脳は……異種の諸労働の同等性という社会的性格を、これらの物質的に違った諸物の、諸労働生産物の、共通な価値性格という形態で反映させるのである」(KI, S. 88).

しかも、私的諸労働の人間労働としての同等性が労働生産物の価値属性として現れるとは、換言すれば、労働における「人的な関係が物的な形態によって隠されている」(KI, 1 Auf., S. 38) こと、「人と人との間の関係」(Kritik, S. 21)が「物の外被の下に隠された関係」(ibid.) として存在するということである。こうして、「同等性」が労働生産物の価値性格として実現されるとすれば、労働の「同等性」は物的におおい隠され、従って価値性格は諸物の自然属性として見えてこざるをえない。それゆえ、実は、先の「私的生産者たちの頭脳」は、単に労働生産物が価値性格を有すると認識するに留まらず、労働生産物はその自然的属性として価値性格を持つと見ていたのである。私的諸労働がその「人間労働の同等性」を実証する労働の抽象的一般性が諸労働生産物の価値として現れ、従って労働の関係が物的関係によっておおい隠されれば、そこに同時必然的に価値は諸物の物理的属性であるとの外観、すなわち呪物性が発生するのである。

私的諸労働の生産物が価値性格を持つことそれ自体は、私的諸労働が人間労働の同等性を実証する独自の仕方として一つの客観的事実であって「仮現」、「錯視」ではない。それだからこそ「労働生産物は、それが価値である限りでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしか

ない」(KI, S. 88)ということが科学的に解明されたとしても、私の商品生産者にとっては「互いに独立な私的諸労働の独自の社会的性格はそれらの労働の人間労働としての同等性にあるのであってこの社会的性格が労働生産物の価値性格の形態をとるのだということが……かの発見の前にもあとにも、最終的なものに見えるのである」(ibid.). 私的諸労働の抽象性、一般性の形態における社会的性格が、労働生産物の対象的性格・価値性格として現れ、実現されるという客観的事実がまず存在し、そしてその事実が、まさに、背後の労働の社会的関係を物的におおい隠すが故に、労働生産物の価値属性はあたかも物の自然的属性であるかのような幻想、呪物性を生みだすのである。⁽¹⁾

要するに自然発生的な社会的分業の諸環をなすものとして社会性を有しながら、その現物形態のままでは私的なものでしかないという矛盾をかかえる私的諸労働は、その生産物の交換によって初めてその社会性を実証する。その交換が諸労働生産物を価値として関係させ、そこにおいて私的諸労働を同じ抽象的人間労働として同等性関係に置く。私的諸労働は、生産物の価値性格という物的形態においてその現物形態(Naturalform)とは区別される抽象的一般性の形態を獲得し、その形態において相互に同等な人間労働としての社会的関係を取りむすぶ。こうして、労働の抽象的な相互関係は物的におおい隠され、商品の価値性格は「使用価値の社会的自然規定性」(Kritik, S. 22)として見えてくるのである。

第二は、「内容」の二番目の規定、すなわち、「継続時間による人間労働力の支出の尺度」が、私の商品生産労働の場合には、いかにして実現されるのかである(物神性節第9パラグラフ)。生産をあらかじめ社会的に規制する家父長制や共同体が存在する場合には、すでにみたように、労働は直接に社会的であるため、その労働力の支出の継続時間は最初から社会的認知を受けた社会的労働時間である。このことは、総労働の各部門への具

体的労働の配分があらかじめ均衡的になされていることを含意する。これに対し、私の商品生産労働の場合、その支出の継続時間は、直接的には社会的に認知された社会的労働時間ではなく、従ってまたその支出量は必ずしも社会的均衡を満たすとは限らない。それゆえ、第一に、仮に各部門への総労働の均衡的な配分が成立した場合でも、その均衡成立下で私的諸労働は「一般的労働時間」(Kritik, S. 20), 「社会的に必要な労働時間」(KI, S. 53, S. 89) としてのみ社会的に尺度される。しかし、私的生産者にとっては、そうした私的労働力の支出を尺度する「一般的労働時間」, 「社会的に必要な労働時間」は、価値量、具体的にはこの場合価値価格を実現する交換比率としてのみ現れ、また実現される。というのは、私的生産者は、価値価格での交換を通してのみ、私的諸労働を「一般的労働時間」, 「社会的に必要な労働時間」として社会的に秤量しうるからである。しかし、これは、私的生産者の無意識的行為の所産である。価値量、この場合価値価格は、それが「一般的労働時間」, 「社会的に必要な労働時間」による私的諸労働の社会的秤量を実現するものであるにもかかわらず、その秤量の内実を物的におおい隠す。抽象的人間労働と価値との関係で生じた物的隠蔽化が、「社会的に必要な労働時間」と価値量との関係においても生じるのである。

しかし、価値量に係わる物的隠蔽化は一層進む。すなわち第二に、価値価格そのものは、市場価格の絶えざる変動、絶えず動揺する偶然的交換比率を通してその平均として成立するにすぎない。価値価格、つまり「社会的に必要な労働時間」による価値量の規定は、労働の各部門への均衡的配分を前提すると同時にそれを実現した。それゆえ、私的諸労働の各部門への均衡的配分は、社会的必要時間の法則が絶えざる諸物の交換比率の変動、市場価格の運動を通して貫徹されることによって実現する。「互いに独立に営まれながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互い

に依存しあう私的諸労働が、絶えずそれらの社会的に均衡のとれた限度に還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的な絶えず変動する交換割合を通じて、それらの生産物の生産に必要な労働時間が……規制的な自然法則として強力的に貫かれるからである」(ibid.)。こうして、私的諸労働の社会的均衡配分を達成する意義を担う「労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の下に隠れている秘密となる」(ibid.)。

要するに、「社会的に必要な労働時間」による私的労働力の支出の社会的尺度、そのベースとなる労働の各部門への均衡的配分の問題は、第一に、価値価格を実現する比率での物的交換関係によって、第二に、さらに市場価格の変動、諸物の現象的運動によって蔽い隠される。それゆえ、労働生産物の価値量規定、交換比率は諸物の自然的属性から生ずるものと見え、「諸物の運動」(ibid.)は「交換者たち自身の社会的運動」(ibid.)の反映であるにもかかわらず、それ自身の独立した運動として見えてくるのである。

第三は、「内容」の最後の規定、生産者たちの労働を介する社会的関連が、私的商品生産者の場合、いかにして実現されるのかである(物神性節第10パラグラフ)。非商品生産社会においては、すでに見たように、生産者は、自己の特殊、具体的労働を直接介して、同等の人間労働の担い手として、労働の支出を直接その継続時間で計るところの一定の社会的関係を結んだ。これに対し、私的商品生産者は、自己の私的労働を一旦抽象的人間労働に還元した上で、具体的には、自己の労働を抽象人間労働の一般的実現形態としてのリンネル織り労働に等置することによって、相互に同等性関係に入る。直接には、社会的形態にない私的諸労働は、まずは、リンネル織り労働との全面的等置関係によってその現物形態(Naturalform)と区別された抽象的一般性の形態を獲得し、その上でその抽象的一般性の形態を介して互いに同等なるものとして社会的関係を取り結ぶのである。

しかし、この労働の抽象性の形態による社会的関係は、諸労働生産物と「抽象的人間労働の一般的具体化としてのリンネル」(ibid., S. 90)との物的等置関係として、さらにこの後者の関係は、諸労働生産物と「一般的等価物としてのリンネル……または金銀」(ibid.)との物的等置関係として現れ、そして実現される。諸生産物と貨幣との全面的等置関係によって、諸生産物と抽象的人間労働の一般的具体化としてのリンネルとの等置関係を介するところの私的諸労働の抽象的關係、抽象的人間労働としての社会的關係が成立するのである。それゆえ、抽象性の形態による私的諸労働の社会的關係は、物的貨幣関係におおい隠された秘密となる。すなわち、「商品世界のこの完成形態——貨幣形態——こそは、私的諸労働の社会的性格、したがってまた私的諸労働者の社会的關係をあらわに示さないで、かえってそれを物的におおい隠すのである」(ibid.)。かくして、諸労働生産物の価値関係、その完成形態としての諸物の貨幣形態、つまり貨幣との全面的等置関係は、諸物の自然的屬性から生ずるものと見えてくるのである。

私的性格、孤立的性格をその直接的性格とする商品生産労働は、他面での自然発生的ではあれ社会的分業の諸環を構成するものとしての社会性を労働生産物の交換において実証する。かくして、労働生産物は、感覚的かつ超感覚的、社会的なもの、商品となり、この商品形態において「いろいろな人間労働の同等性はいろいろな労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の尺度は労働生産物の価値量という形態を受けとり、最後に、生産者たちの労働の前述の社会的規定がそのなかで実証されるところの彼らの諸關係は、いろいろな労働生産物の社会的關係という形態を受け取る」(ibid., S. 86)。労働の社会性の超歴史的な「内容」は、「価値の諸規定」として物的規定性を受け取るのである。と同時に、この「価値の諸規定」は、人々にとっては、

諸物の自然的属性として映る。というのは、「価値の諸規定」は、私的諸労働が「内容」を実現する独自の形態、すなわち、(1)抽象的人間労働としての私的諸労働の同等性、(2)社会的に必要な労働時間による私的労働力の支出の社会的尺度、(3)抽象的人間労働を媒介軸とする私的諸労働の社会的関係、を物的におおい隠すからである。「内容」を実現する私的諸労働の独特な社会性が、「価値の諸規定」として物的形態によって実現されとすれば、私的諸労働の社会的関係は、物的形態の下に隠された秘密とならざるをえないのである。

このように、人の物化は同時必然的に物の人化を伴う。商品形態は生まれながらにして呪物性を身にまとう。「商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも彼らの外に存在する諸対象の社会的関係として反映させる」(ibid.)。つまり、商品形態は、生産者たちの社会的関係を諸労働生産物の社会的関係による「置き替え (Quidproquo)」(ibid.)、諸物相互の呪物的関係において実現するのである。

以上、われわれは、歴史貫通概念である「内容」、労働の抽象的一般性の形態、「価値の諸規定」、これら三者の間の論理的関連をつけることによって商品の呪物性の秘密を解明した。⁽²⁾⁽³⁾

- (1) 「媒介する運動の『消失』が商品世界において日々現実に行われている客観的な過程であるのとまったく同様に、この『消失』から生ずる虚偽の仮象もまた、商品世界の客観的な現実であって、商品生産者の単なる主観的な錯覚ではない」(佐藤金三郎「商品の物神崇拜」、真実他『国家と市場機構』ミネルヴァ書房、1982年、所収、p. 250)。
- (2) 商品は、その有用性、使用価値視点から見れば、Ding である。Ding は、商品の自然的素材規定をなす。この Ding は、価値性格を獲得することによって、商品、Sache となる。素材規定に社会的規定が添加されることによ

って Ding は Sache となる。平子友長氏は、この Ding と Sache の区別性を基礎に、マルクスの物象化論は、物象化 Versachlichung と物化 Verdinglichung の二段階からなると説かれる。第一段階 (Versachlichung) は、「Person の Sachlich な関係行為の所産」(平子友長「マルクス経済学批判の方法と弁証法」『唯物論』第8号, 1977年, 11月, p. 57) として Ding がその「質料的な規定に加えて、社会的形態規定をも有する物」(同), すなわち Sache に転化する過程である。いわば、人と人との関係が物と物の関係として実証される客観的過程である。第二段階 (Verdinglichung) は、さらに、「形態と質料との『癒合 Verwachsen』『合生 Zusammenwachsen』『合致 Zusammenfallen』」(同, p. 58) によって「Sache が社会的関係から切りはなされて(疎外), 自立化し, 社会的形態規定を消失させ」(同, p. 57), 「ここに新しい『自然』、『物 Ding』が形成される」(同, p. 58) 過程である。このように、氏は「マルクスの物象化論……は……Person が Sache として現象する第一段階 (Person→Sache または Ding→Sache) を経て、次に, Sache そのものが形態規定を消失して Ding となる第二段階 (Sache→Ding) までつきすすみ、こうして全体として近代市民社会が『永遠化』されるメカニズムを理論的に解明する」(同) と把握される。

以上の平子説に対するわれわれの見解は、次の三点である。第一に、呪物性発生の過程を、Ding がその質料規定に加えて社会的形態規定を得て Sache となる第一段階とそれら両規定が直接的に癒合・合成する第二段階の二段で把握する視点は正鵠を得たものといえる。われわれ自身、労働の一般的社会的諸規定が、自然発生的社会的分業下、価値、価値量、価値形態として物的に表現される事態を客観的事実として把握した上で、その物的表現機構そのものが必然的に価値の諸規定＝生産物の物理的属性という外観を生み出すことを示し、よって商品の呪物性の発生メカニズムを解明したのである。尚、過程を二段で把握することなく、例えば、後半第二段階次元でのみ理解しようとするれば、第一段階の客観的事態すらも「虚構」とならざるをえないことは広松批判で述べたところである。しかし、第二に、氏は、第二段階の理解において、形態と質料との合生、癒合を「形態規定の消失」(同, p. 59) と規定するが、それは誤りである。第二段の枢要は、形態規定の消失にあるのではなく、形態規定、具体的には、価値、価値量、価値形態の価値の諸規

定が、形態規定と質料規定の合生により、質料化すること、つまり、価値の諸規定が生産物の物理的屬性と見えてくる事態にある。すなわち、形態規定が物の社会的自然属性と錯認される事態にある。仮に、氏の言われるように、形態規定が消失するとすれば、Sache が単に元の Ding へ後戻りするだけである。第三に、呪物性の秘密を二段階に分けて考察する見地は、すでに述べたように妥当なものであるとしても、しかし、第一段階＝物象化 Versachlichung、第二段階＝物化 Verdinglichung と規定することについて言えば、それは、マルクスの物象化、物化についての用語法理解としては必ずしも正確なものとはいえない。平子氏は、物象化 Versachlichung は、物化 Verdinglichung と区別され、未だ形態規定と質料規定との合生が生じていない第一段階を指すとするが、マルクスにはそうした限定的使用の事実は存在しない。物象化は第二段階を表示するものとしても用いられる。「利子生み資本としての資本の完全な Versachlichung、転倒、倒錯状態」(Mehrwert, III, S. 448)。「G-G' で見るのは、資本の無概念的な形態、生産関係の最高度の転倒と Versachlichung、すなわち、利子を生む姿……資本の単純な姿である」(KIII, S. 405)。資本は利子生み資本において、貨幣を生む貨幣としてその呪物性を完成させるが、その資本の呪物性の完成をマルクスは、物象化 Versachlichung と規定するのである。また、次の引用文では、物象化と物化が同義として併用されている。「経済的三位一体では、資本主義的生産様式の神秘化、社会的諸関係の物化 Verdinglichung、物質的生産諸関係とその歴史的社会的規定性との直接的合生が完成されている。……このようなまぢがった外観と偽瞞、このような、富の色々な社会的要素の相互間の独立化と骨化、このような、物の人格化と生産関係の物化 Versachlichung……を解消させたということは、古典派経済学の大きな功績である」(ibid., S. 838. 傍点引用者)。ここでは、形態規定と物質規定との直接的合生過程を示す物化は、「このような」という指示語を介して物象化と直接連結されているのである。れわれの結論を述べよう。商品の次元で言えば、物象化も物化も事象としては労働生産物の商品への転化を指し、どちらも先の第一、第二両段階過程を含む。商品形態そのものが、私的労働の社会的性格を実証する形態(第一段階)でありながら、そのこと故に、私的労働の社会的性格を物的におおい隠す(第二段階)ものだからである。

- (3) 山本広太郎氏も平子氏と同様、物象化 *Versachlichung* と物化 *Verdinglichung* の区別を強調される。山本氏の独自論点は次の二点である。第一に、氏は、物化 *Verdinglichung* に呪物性を対応させ、物象化 *Versachlichung* に疎外を対応させる。「知覚はこれらの *Sache* [商品、貨幣、資本、利子生み資本—引用者] を *Ding* とその属性として、人間の社会的関係を物 *Ding* の属性として反映するほかなかった。これが社会的関係の物化 *Verdinglichung* であり、呪物 *Fetisch* の生成であった」(『差異とマルクス』青木書店、1985年、p. 115)。他方、「人格 *Person* の物件化 *Versachlichung* と物件 *Sach* の人格化 *Personnifizierung* は……実践的自由なものである人格 *Person* が自らのつくり出した物件 *Sache* によって逆に支配されるという現実の転倒を意味している」(同書、p. 119)。第二に、氏は、これら物化と物件化の関連を、両者「不可分な一つのものであり、その相違は現実次元でみるか、認識次元でみるかの相違にある」(同) とされる。ここでは、物化と物件化は階層、重層構造にはないのである。

物化と物件化(物象化)の区別だてに対しては、平子氏に対してと同様の批判が妥当する。すでに示したように、マルクスの用語法において両者の区別はない。また、物化と物件化の区別をマルクスの用語法としてではなく、山本氏独自のものと解したとしても問題は残る。物化を認識次元のもの、物件化を現実次元のものとして、両者を単に分析視角の相違による並列的な関係として把握すれば、物神性論の有機的重層的把握は不可能となる。すなわち、物化・呪物性の生成はその発生基盤を失い、物件化・疎外は、商品、貨幣、資本に付着する呪物性とは係わりないものとなる。本文で示したように、*Ding* の *Sache* への転化は論理必然的に *Sache* の社会的性格が *Ding* の属性であるかのような外観を生み出すのであり、また、そうした呪物性を不可避的に伴う *Sache* のが人々の意識、行動を規制するという疎外状態を生み出すのである。山本氏の用語法に従って言えば、物化の基礎には物件化が存在し、物件化は物化を不可避的に伴う。物化を不可避的に伴う物件化、すなわち、商品、貨幣、資本こそが疎外態をなす。物件化と物化は、現実次元でみるか認識次元でみるかの視角の相違としてではなく、本質と現象の関係として把握されなければならない。

第四節 商品形態の特殊歴史性

それでは、商品の呪物性とその秘密の解明は、商品分析においていかなる意義を持つのか。すなわち、物神性論は、『資本論』第一章の商品論においていかなる位置を占めるのか。価値実体論および価値形態論と物神性論との論理的関係如何。以下、そのことを明らかにしよう。

『資本論』第一章「商品」の分析対象は、市場において互いに交換、売買されている日常あるがままの商品である。市場において、諸労働生産物は商品として一定の量的規定を伴う価値物として相互に交換、価値関係を取り結ぶ。商品は、共通の価値属性を有するものとして交換関係に入り、またその交換関係において互いの共通性を実証する。価値対象性、その量的規定性、それらが実際に現れるところの価値関係、これら価値、価値量、価値関係三者の「価値の諸規定」が単なる労働生産物と商品とを区別するメルクマールをなす。だが、これら「価値の諸規定」は、商品分析の第一歩とはいえ、労働生産物が交換のなかで受け取る諸性格の単なる記述にすぎない。それゆえ、この「価値の諸規定」の内実が、価値実体論、価値形態論において分析される。価値実体論においては、価値の実体として、労働の現物形態からその具体性の捨象により抽象的人間労働が析出され、さらに価値量つまり、抽象的人間労働の量は、社会的必要労働時間によって尺度されることが示された。また、価値形態論においては、商品相互の価値関係における価値、さらには価値実体の表現、顕現メカニズムが解明された。ちなみに、完成された価値形態、一般的価値形態は、諸商品を共通な価値対象性として、すなわち、同質の人間労働の凝固物として相互に現わす形態であった。要するに、価値実体論、価値形態論においては、価値、価値量、価値関係三者の「価値の諸規定」と価値実体との内的関連が明らかにされたのである。これに対し、物神性論においては、それまで所与と

して前提されてきた商品形態，具体的に言えば，「価値の諸規定」が歴史観点からとらえ返される。商品形態，「価値の諸規定」の特殊歴史性が解明される。呪物性の秘密の解明がまさに「価値の諸規定」の特殊歴史的性格を照出するのである。⁽¹⁾

商品に付着する呪物性は一体どこから生じたのか。価値の諸規定の「内容」からではない。「内容」それ自体は，人間が社会的労働を行う際，必ず満たさなければならない歴史貫通的条件を示す。非商品経済，例えば第二節で列挙したロビンソンの孤立人，中世ヨーロッパの荘園制，農村の家父長制下の自給自足社会，自由人連合社会においては，個々の労働は，その現物形態のままで「内容」を満たした。非商品生産社会においては，独立人なり，人格的支配隷属関係なり，種族的依存関係なり，共同体規制の存在によって，各労働は，直接に社会的形態にあった。そのため，労働は，その具体的有用労働のままで「社会的紐帯」を形成したのである。しかし，自然発生的社会的分業に基づく商品生産様式においては，個々の労働は私的労働であり，直接それ自体は社会的形態にはない。それゆえ，私的諸労働はそのままでは「内容」を満たしえない。しかし，他方で，私的諸労働は社会的分業の諸環としてその社会性を実証しなければならない。私的諸労働は，抽象的一般性の形態を受け取ることによって，社会的労働として「内容」を満たすことが可能となる。しかも，その労働の抽象的一般性の形態は，「価値の諸規定」として物的に表現され，従って物的形態において実現される。それゆえ，私的諸労働の抽象的形態での特殊な社会的性格は，物的形態によっておおい隠されざるをえない。かくして，商品の超感覚的社会的性格は，物としての商品にそなわる自然的属性として現れてくる。私的生産者は，私的諸労働の社会性を労働生産物の交換によって実証し，従って，いろいろな人間労働の同等性を価値として実現し，また継続時間による労働支出の計測を価値量として実現し，そして労働を介する

人と人との関連を価値関係として実現するが、そうした人の物化が物の人化、呪物性を必然的に生み出すのである。

こうした呪物性発生のメカニズムの解明は、同時に「価値の諸規定」の特殊歴史性を明らかにする。今では、「価値の諸規定」は、私的諸労働が「内容」を労働の抽象的一般性において実現するところの形態であることが明らかになった。「内容」は、労働が社会的であるための歴史貫通的、一般的条件をなすが、「価値の諸規定」はこの「内容」を実現する一つの形態、特殊形態をなす。「価値の諸規定」は、一般に対する特殊をなし、超歴史的形態に対する特殊歴史的形態をなす。「価値の諸規定」は、私的労働に基づく社会的分業という特定の歴史的生産条件の下で、超歴史的、一般的範疇である「内容」を成立させる特殊歴史的形態をなすのである。特殊性、特殊歴史性は、一般性、超歴史性との対比によってのみ規定される。マルクスは、呪物性の秘密の解明において、抽象的人間労働範疇を媒介とする「内容」と「価値の諸規定」との関連づけ、「内容」と「価値の諸規定」との対比によって、一般と特殊、超歴史性と特殊歴史性との対比、関連づけを行い、それまで前提とされてきた「価値の諸規定」とその実体、従って商品形態そのものの特殊歴史性を明らかにした⁽²⁾⁽³⁾のである。

価値実体論、価値形態論においては、価値（価値量）から価値実体へ、そして価値実体から価値関係・価値形態へという形で「価値の諸形態」と価値実体との関連づけがなされたが、物神性論においては、さらに「価値の諸規定」、および価値実体と「内容」との関連づけがなされる。かくして、「価値の諸規定」、価値実体、「内容」これら三者の論理一貫した有機的関連の構造が明らかとなる。生産が独立した私的生産者によって担われる社会においては、「内容」は「価値の諸規定」としてのみ実現されるのであるが、マルクスは、物神性論において、そうした労働生産物の商品への転化の必然性を示し、もって商品形態の特殊歴史的的存在性を明らかにし

たのである。

- (1) 廣松渉氏も、物神性論において、それまで前提とされてきた「価値」が「対自的に把え返される」（前掲『資本論の哲学』p. 201）と説かれる。しかし、氏の言う「把え返し」は、価値概念の歴史的相対把握ではなく、価値概念の非実存＝虚実化を意味する。「人々は、商品体はそれ自身で『内在的交換価値』を蔵しており、商品それ自身が『価値』という対象性をそなえているものと私念してはいないか？ マルクス自身『商品の二要因』を論じ『労働の二重性』……においては、そのような日常的私念に仮託するかたちで議論を進めていた。『価値形態論』……でもまだ、多分に日常的私念に仮託した行文がみられた。今や、しかし、当の仮託が対自的に把え返される必要がある」（同書、pp. 200-1）。氏は、商品の価値規定は商品の呪物性にとらわれた日常的私念に基づくものであり、物神性論では、それまで前提とされてきたそうした日常的私念の産物としての価値概念が「物象的錯視」（同書、p. 205）にはかならないことが解明される、と主張されるのである。そうではない。物神性論は、それまで前提とされた価値の諸規定を歴史的観点からとらえ返す意義を有するのである。
- (2) 古典派は「不完全ながらも、価値と価値量とを分析し、これらの形態のうちに隠されている内容を発見した」（KI, S. 94）。つまり、古典派は、価値の背後に労働の問題が存在するとは認識していたのである。その意味では古典派は呪物崇拜に陥ることは免れた。古典派の限界は、商品形態を永遠の自然形態と見做したことにある。それゆえ、彼らは「なぜ労働が価値に、そしてその継続時間による労働の計測が労働生産物の価値量に、表わされるのか、という問題は、いまだかつて提起したことさえなかったのである」（KI, S. 95）。ブルジョアの生産様式を永遠のものとして見誤れば、労働はいかなる場合でも価値に結実すると判断されざるをえない。また、その場合、私的労働はそれと区別される社会的形態をいかにして獲得するのかという問題意識は生まれようはずがない。そこから、古典派の価値形態分析の欠落という問題が生じる。商品の価値形態は、まさに、私的諸労働の生産物を社会的なものとして、つまり人間労働一般の単なる凝固として相互に表現する一つの仕方・様式をなすからである。
- (3) 廣松渉氏は、「古典派経済学の投下労働価値説では人間の労働の価値対象

性への対象化ということが永遠の自然必然的な事実であるものと見做されてしまう」（前掲『資本論の哲学』、p. 217）と主張されるが、これもまた疑問である。古典派とマルクスの価値把握の相違は、価値範疇の前提としての商品交換を超歴史的ととるか、特殊歴史的ととるかを起点とし、古典派は、商品生産様式を永遠のものと見做し、商品交換を超歴史的なものとして見做したのために、労働はいついかなる場合においても価値に結実すると誤認したのである。

むすびにかえて——疎外論と物神性論——

マルクスは、初期疎外論においてすでに、商品生産関係、資本・賃労働関係の二大関係視点から、プロレタリアートの疎外状態、非人間的状態を説明する構想を有していた。とすれば、さしあたり、本稿の分析対象である商品生産関係について見た場合、初期マルクス類の疎外論と後期マルクス物神性論とはいかなる関係にあるのか。疎外論と物神性論は、継承、発展の関係にあるのか、それとも廣松渉氏等が言うように両者は断絶の関係にあるのか。

廣松氏は、疎外論の課題が「活動主体とその客体——労働とその生産物、等一の直接的な関係に即して」の主体の『外化』、活動の『事物化』の(1)説明にあるのに対し、物象化論の課題は価値・価値実体を「社会的・共同主観的な協働的關係の物象化」(2)として示すことにあり、従って疎外論と物象化論との間には決定的な断層が存在すると主張される。要するに、氏は、疎外論は超歴史的普遍的個人、すなわち「類的存在としての『人間』」(3)と事物との関係を扱い、物象化論は、特殊歴史的「社会的諸關係の総体」(4)として人間と事物との関係を扱うという発想上、分析観点上の断絶が両者の間に存在するというのである。しかし、この主張は、そもそも疎外論、物象化論それぞれの理解において決定的難点を持つ。人間の類的存在規定は、単なる人格＝主体なる個人としての規定ではなく、社会的関係におけ

人間存在の規定であり、また、物神性論においても疎外論におけると同様、歴史貫通的な社会的人間存在の類的範疇規定は重要な意味を持つのである。

人間は社会的動物として「類的精神」を有し「類的活動」⁽⁷⁾を行う。「類的活動」の「現実の意識的な真の定在は社会的活動であり、社会的享受である」⁽⁸⁾。つまり、人間は「真に共同的な存在」⁽⁹⁾として「人間的な共同体」を創造する。しかし、私的所有の下では、そうした人間を類的存在たらしめる「共同的存在」、人間的社会関係は疎外され「疎外の形態のもとにあらわれる」⁽¹¹⁾。その疎外形態が商品交換である。「交換すなわち交換取引」は、私的所有の枠内での人間の社会的行為、類的行為、共同存在、社会的な交通、統合である。またしかるがゆえに、それは外的な外在化された類的行為である⁽¹²⁾。しかも、「私的所有を前提すれば、交換は価値にまで進まざるをえない」⁽¹³⁾。要するに、人間本来の「類的行為」は「私的所有」によって疎外され、交換取引、価値という抽象的關係として現れる。交換、価値関係は私的所有の枠内での疎外された形態による類的活動なのである。

「類的行為」、「私的所有」、類的行為の疎外形態としての「交換・価値関係」、これら三概念からなる商品生産関係視点に基づく疎外論の構図は、後期マルクス物神性論においてそのまま生かされる。物神性論における商品形態の特殊歴史性規定は、その実、商品形態が労働生産物の疎外形態をなし、従って商品生産労働が人間労働の疎外形態をなす事実を剔抉する意義を持つ。物神性論においては、「類的行為」は、価値の諸規定の「内容」として、また「私的所有」は、ヨリ具体的に、自然発生的社会的分業下の「私的諸労働」として展開される。すでに見たように、人間労働の社会的性格を一般的、歴史貫通的に表現する「内容」(類的存在規定)は、互いに独立に営まれる私的諸労働(私的所有)にあっては、諸労働生産物の交換・価値関係として物的形態において実現される。それゆえ、交換・価値

関係は、私的所有を基礎とする自然発生的社会的分業の下における「内容」の特殊歴史的実現形態であると同時に、その外在化され、疎外された形態をなす。「類的行為」＝「内容」と価値の諸規定との対応づけは、価値の諸規定が「内容」の疎外形態であることを示す意義を持つのである。特殊歴史的規定＝疎外性規定である。それゆえ、「類的行為」と「内容」との対応を見失い、「内容」を商品生産固有の特殊歴史的なものとして誤認⁽¹⁴⁾し、従って物神性論における「内容」の位置づけに失敗すれば、「内容」との関連づけによって、商品形態、つまり、価値の諸規定およびその実体としての抽象的人間労働範疇の特殊歴史的・疎外性を明らかにした物神性論の意義は完全に見失われることになる。

マルクスは、歴史貫通概念をなす「内容」が労働の現物形態 (die Naturalform der Arbeit) のままで直接的に実現される非商品生産社会との対比を通して、「内容」がその外在化された形で、つまり価値の諸規定という物的形態を媒介としてのみ実現される商品生産様式の特殊歴史的性を解明し、また同時にそのことによって商品生産様式の疎外性を示したのである。すなわち、マルクスは、物神性論において、商品生産関係視点に基づく初期マルクス疎外論の展開、具体化を試みたのである。それゆえ、疎外論≠物神性論という断絶説は成立しない。これがわれわれの最終結論である。

(1) 疎外論を展開したバリ時代 (1843—45年) においては、私的所有概念によって、ある時は商品生産関係が表象され、またある時は資本・賃労働関係が表象され、両関係概念の厳密な区別、関連づけは未解決であった (以上の点については、拙稿「私的所有と競争による不均衡化」『世界経済評論』1981年、3月号を参照されたい)。両関係概念の論理的関連づけは、『資本論』において、第一部第1～2篇とそれ以降の篇との論理的編成関係として実現、確立するに至ったことは言うまでもない。

(2) 廣松渉『マルクス主義の地平』勁草書房、1969年、p. 247.

- (3) 同上
- (4) 同書, p. 257.
- (5) 廣松渉『物象化の構図』岩波書店, 1983年, p. 48.
- (6) 前掲『マルクス主義の地平』, p. 248.
- (7) *Marx Engels Gesamtausgabe*, Vierte Abteilung, Band 2, Dietz Verlag, Berlin, 1981, S. 452. 杉原四郎・重田晃一訳『マルクス経済学ノート』未来社, 1970年, p. 96.
- (8) Ibid.
- (9) Ibid.
- (10) Ibid.
- (11) Ibid.
- (12) Ibid., S. 454. 訳 p. 101.
- (13) Ibid., S. 448. 訳 p. 88.
- (14) 廣松渉, 前掲『資本論の哲学』, pp. 211-2 参照.
- (補注) 久留間氏が「価値形態論では貨幣の『如何にして』が論じられ、物神性論ではその『何故』が論じられるのに対して、交換過程論ではその『何によって』が論じられる」(久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店, 1957年, p. 40)と主張されて以来、価値形態論、物神性論、交換過程論三者の関連がしばしば論じられるところであるが、われわれの見解については、本稿第四節、および次の論文を参照。拙稿「相対的価値形態の内実」(『一橋論叢』第96巻第2号, 1986年8月号), 拙稿「交換過程と貨幣の必然性」(種瀬茂編著『資本論の研究』青木書店, 1986年, 第6章)。結論的に言えば、価値形態論では、すでにその成立が前提とされた商品相互の交換関係、価値関係のなかで商品の価値および価値性格がいかんして表現されているのが解明され、またその解明を通して貨幣が何故に一般的等価物として直接的交換可能性を有するのかが明らかにされる。これに対し、物神性論では、そうした価値表現関係を内包する諸商品の価値関係、つまり商品形態が超歴史的「内容」を実現する特殊歴史的仕方、形態であることが示される。ところで、以上の価値形態論では、貨幣と諸商品との一般的交換・価値関係そのものの成立は所与のものとして前提されていたのであり、また物神性論では、貨幣はそれが商品である限りにおいて特殊歴史的規定を受けたに留まる。

これらの残された課題が交換過程論において解明される。すなわち、交換過程論において、商品交換を前提とした場合、諸商品は何故に一般的等価物を必要とするのか、つまりそれまで所与とされてきた貨幣と諸商品との一般的交換・価値関係成立の必然性、その根拠が解明され、また同時に、商品交換の必然的産物として貨幣が商品あるいは商品交換と一体不可分のものである以上、貨幣も商品同様、特殊歴史的存在物であることが改めて論定されるのである。